

第40回言語教授法・カリキュラム開発研究会 全体研究会 「グローバル時代の文化理解と教育」

2015年12月11日（金）、甲南大学2号館1階のLoftで、第40回言語教授法・カリキュラム開発研究会全体研究会が開催された。本研究会の「グローバル時代の文化理解と教育」という総合タイトルのもと、University of Pittsburgh 講師のステイブン・D・ラフト (Stephen D Luft) 先生が基調講演を行った（別紙参照）。ラフト先生の基調講演のタイトルは「コミュニケーションにおける文化の教授法」である。ちなみに、参加者は31人であった。

以下では、その内容を簡単にまとめることにする。基調講演の章立ては、次の通りである。

1. 言語と文化
 - ①言語は何なのか
 - ②文化は何なのか
 - ③コミュニケーションにおける文化は何なのか
2. コミュニケーションにおける文化の教授法

つまり、言語と文化、コミュニケーションにおける文化の教授法という2章立てである。その内容は、言語と文化の関係、言語の背後にある文化、そしてコミュニケーションの場において、言語の背後にある文化を、学習者にいかに教えるかということである。

1. 言語と文化

①言語は何なのか

言語と文化を、それぞれ第一、第二と名付ける。つまり、幼い頃から自然と身に付いているのは第一の言語と文化（主に母語話者）であり、大人になってから取得しているのは第二の言語と文化（第2外国語学習者）である。

まず、言語は形態と意味の連結である。そこで形態は、語句、文法、成句の形態を含むと考えられる。そして意味は、具体的な意味、抽象的な意味、社会言語論的な意味の3つの意味が含まれる。この形態と意味の習得というのは、一般的な習得過程を用いるものである。

②文化は何なのか

一方、文化は「ある人類の生活のすべて」と定義し、ここではコミュニケーションにおける文化に限って取り上げる。言葉を使ってする行動、そして言葉を使わないでする行動が見られる。

③コミュニケーションにおける文化は何なのか

コミュニケーションにおける文化は、語彙と文法以外でコミュニケーションに影響するものである。つまり、語彙と文法に優れた人でも、文化がわからないと正確なコミュニケーションがとれない。

例えば、アメリカ人が日本人の家庭を訪問した際、日本人の家庭に飾られている絵に対し、アメリカ人は「この絵が好きです」ということがある。アメリカ人は「絵が綺麗だ／美しい」という意味で話しているが、日本人は「この絵がほしい」という意味合いで捉え、絵をアメリカ人に提供することがしばしばある。

この場での日本人とアメリカ人の意味の捉え方について整理すると、次のようになる。

| 文化の形態 | アメリカの意味 | 日本の意味 |
|------------|-----------------------|-------------------------|
| ーが好きです。 | 望ましいものを持っている | 望ましいものを持っている ／ものが欲しい |
| ものを提供する | ものを貰って欲しい | ものを貰って欲しい ／気を使っている |
| 悩みながら断る | ものが欲しくないが、失礼なことをしたくない | ものが欲しいが、失礼なことをしたくない |
| ものを何度も提供する | 相手がどう思っても貰って欲しい | ものを貰って欲しい ／気を使っている |

日本語の文法とコミュニケーションが正しくても意思疎通が正確に行われていない代表的なケースである。

コミュニケーションにおける日韓の差でもあるが、言葉を交わす際、過ちがないのに日本人はよく謝る。一方、アメリカでは過ちがなければ謝らない。

そして、日本人はよく挨拶をしたりするが、アメリカでは挨拶するかどうかは自由である。ここからも日本人とアメリカ人とでは認識のずれが生じる。

次に断り方にも差がある。つまり、日本人は断る際に適応性のある断る理由を言い、相手の要求に従うための情報を聞く、返事するのを先延ばしにするといった行動が見られる。一方、アメリカ人は相手の要求に従いたい気持ちを表しつつ、適応性のない断る理由をいう。他の提案をしたりするなどの行動が見られる。どちらも、第一文化の人に良い印象を与えるし、第二文化の人ならば丁寧ではなく自己中心的に聞こえることがある。

ところで、言葉だけではなく言葉を使わないでする行動のジェスチャーもコミュニケーションに影響を与える。例えば、ポケットに手を入れたまま話をする日本では失礼であるが、アメリカでは失礼ではない。あくびも同じであると言える。そして、プレゼントに関する認識の差である。つまり、訪問する際などの場面では、主に食べるものをお土産として持参する。しかし、アメリカ人はお土産を考えずに行く。アメリカでは、主にクリス

マス、誕生日にプレゼントをする習慣があり、なおプレゼントは食べるものではない。さらに、パーティに招待された時の時間について考えよう。日本人は定刻に合わせて行くが、アメリカ人は遅れていく。なぜなら、定刻は格好悪いということになるからである。

文化、語彙と文法の差についてである。まず、文化はルールを破ると利害が生じ、ルールを破る原因が性格である可能性があり、また形態が連結する意味が性格の質を表すことが多い。

次に、語彙と文法はルールを破っても利益（利害）にはならず、ルールを破る原因は言語能力であることが明らかであり、形態が連結する意味は人の性格と関係ない。

この文化、語彙と文法の相関関係を示すと、表の通りである。

| | 語彙 | 文法 | 文化 |
|-------------------|----|----|----|
| 第一と第二言語の違いが気付きにくい | - | + | + |
| ルールに従わないと利害が生じる | - | - | + |

すべての文化は、ある状況で決まった行動をする必要性を与える道徳によって義務を負わせるのである。

2. コミュニケーションにおける文化の教授法

コミュニケーションにおける文化の教授法であるが、学生に文化を教えるのは学生のためになる。目標とする言語圏に住んでいても文化の上達は言語より遅い。第一文化と第二文化の違いは気付きにくく、文化の間違いをしても直されないケースが多い。しかし、教師が教えると学生はもっと早く学べるのである。

教師の効果的な教え方は、説明と練習である。まず、文化の説明は、㊶第二文化の形態の説明、㊷第二文化の形態が起こるコンテキストの説明、㊸第二文化の形態が連結する意味の説明、㊹第一文化の同じコンテキストで同じ意味を表す形態の説明、㊺第二文化で、第一文化の形態が表す意味の説明を行うのが望ましい。ところが、学生の全員が同じ第一文化を持たない場合、㊹と㊺を行っても効果的ではない。

その効果的な教え方として、文化の練習が取り上げられる。練習においては、フィードバックをするのが大事であるが、そこにも問題がある。その理由は、(Ⅰ)文化の間違いは間違いではなく性格の可能性がある。(Ⅱ)第二文化の間違いを直すと第一文化を認めないようと思われる可能性がある。(Ⅲ)文化の間違いを直すと、感情を損なったと思われる可能性がある。(Ⅳ)文化の間違いを直すと自体が、文化のルールの違反になることがある。(Ⅴ)学生が、学生同士で第二文化の形態を使うのに抵抗することがある、からである。

その解決方法としては、(i) ロールプレーを行うこと、(ii) 学生の第一言語で文化を直すこと、(iii) 文化を学ぶ目標をはっきりと伝えることが重要である。

(文責 金 泰虎)